

# 第2部 先行事例（案）

第2部では、施設形態ごとに計11校の学校施設の事例を紹介し、第1部で述べた小中一貫教育を実施する学校施設の計画・設計における基本的考え方や留意事項について、その具体的内容を解説する。

## 本事例で紹介する第1部で述べた計画・設計上の留意事項

	施設一体型									施設分離型	
	1 湖南小中学校	2 春日学園	3 荏原平塚学園	4 はるひ野小中学校	5 飛鳥学園	6 大原学院	7 京都教育大学附属 京都小中学校	8 府中学園	9 奈留小中学校	10 東山泉小中学校	11 府南学園
掲載ページ	P.27	P.31	P.35	P.39	P.43	P.47	P.51	P.55	P.59	P.63	P.65
開校年	平成17年	平成24年	平成22年	平成20年	平成22年	平成21年	平成22年	平成20年	平成20年	平成26年	平成20年
児童生徒数 (特別支援学級:児童生徒数)	205(0)	1451(13)	537(0)	1388(9)	374(3)	77(2)	861(35)	991(17)	85(1)	693(10)	1302(35)
普通学級数 (特別支援学級数)	9(0)	43(4)	19(0)	41(9)	15(3)	9(2)	27(6)	30(4)	7(1)	23(3)	48(13)
学年段階の区切り	6-3	4-3-2	4-3-2	4-3-2	4-3-2	4-3-2	4-3-2	6-3	4-3-2	5-4	6-3
整備手法	増築・改修	新築	新築	新築/ 増築・改修	新築	改修	増築・改修	新築	新築	新築/ 増築・改修	改修
小中一貫教育に適した学校施設の計画・設計における留意事項											
一貫性確保への対応 教育活動の対応	小中一貫した教育課程に対応した施設環境		●		●		●	●	●	●	●
	学年段階の区切りに対応した空間構成、施設機能			●	●	●		●	●		
	異学年交流スペースの充実	●	●	●		●	●	●	●		
	小中一貫教育の取組の高度化に資する共同利用					●			●		
学校運営の一貫性確保への対応		●		●		●					●
小中一貫教育の実施に適した安全性の確保	●		●		●			●			
既存学校施設の有効活用							●				
地域とともにある学校施設の整備	●		●				●			●	

〈作成上の留意点〉

- ・事例に使用する学校名は愛称を用いている。
- ・各校の児童生徒数、学級数などの情報は別途記載がない限り平成26年度時点のものとする。
- ・各事例の開校年は小中一貫教育等の開始年を示す。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

# 湖南小中学校

福島県 郡山市立湖南小学校・湖南中学校



校舎外観

## 背景

湖南地区は少子・高齢化が進み、小学校の複式学級が年々増加傾向にあった。平成11年度に地域住民を中心として「湖南地区小学校の統合を促進する会」が発足。市に要望書を提出するなど、小学校の統合に向けた推進活動を実施した。

地区内の5つの小学校を「湖南小学校」として統合し、既存の中学校（湖南中）校舎の隣に小学校校舎を増築し、平成17年4月、小中一貫教育を開始した。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

	学 年									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
運営状況	学年段階の区切り	小学部					中学部			
	授業方法	学級担任制					教科担任制			
	運営方式	特別教室型								
	授業時間	45分								
	校長	校長1人								
	副校長・教頭	1人					1人			
	部活動	なし					部活動			
	PTA	PTA組織を一本化								
	施設利用状況	ゾーニング	1階		2階		2階		1階	
		校長室	1階							
職員室		1階								
保健室		1階								
特別支援学級		なし								
音楽室		1階								
家庭科室		2階								
図書室		1階					1階			
ランチルーム		2階(180席)					各教室			
昇降口		1階								
体育館		1階(小アリーナ)					1階(大アリーナ)			
グラウンド		芝プレイコート					グラウンド			
プール		1階(屋内)					1階(屋外)			
給食室	1階(単独校方式)									

## 学校概要

学校規模	[小]普通:6学級(133人) [中]普通:3学級(72人)
学年段階の区切り	6-3
開校年	平成17年(2005年)
構造	鉄筋コンクリート造
階数	地上3階
校地面積	42,633㎡
延床面積	8,346㎡

## 教育上の特色

「ともに生き 未来を創る たくましい湖南の子」を教育目標とし、地域に開かれた学校づくり、郷土学習の充実など地域連携の強化や恵まれた自然を活かした環境学習の充実を行うとともに、9年間を一貫させた教育課程の編成を行う。小学1~2年生は、学級担任制を基本とし、2~6年生はゆるやかに教科担任制を導入し、国語、社会、理科、英語、音楽、美術、体育と多くの教科での小中相互の乗り入れ授業を行っている。

また中学校教員による小学5~6年生への英語表現科授業に加え、外国人教師による英語表現科授業を小学1年生から実施している。

## 学校運営(マネジメント体制)

1人の校長が小・中学校長を兼務する。教務関係、生徒指導関係、学校事務は共同実施している。

## 計画・設計上のポイント

1. 異学年交流スペースの充実
2. 小中一貫教育の実施に適した安全性の確保
3. 地域とともにある学校施設の整備

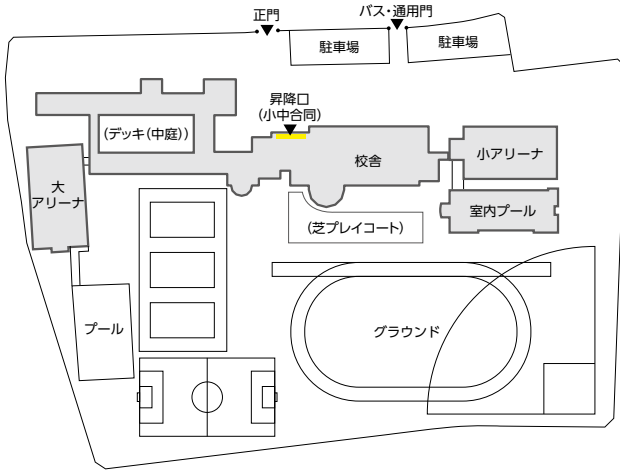
## 施設上の特色

**【全体の構成】** 校舎は西側（既存部分）が主に中学校ゾーン、東側（増築部分）が主に小学校ゾーンとなっており、体育館、プールはそれぞれのゾーンの先端に1つずつ整備されている。

**【運営の一貫性確保】** 小中のゾーンをつなぐ校舎中央部分の1階に小中一体の職員室、保健室等の管理諸室が配置されている。昇降口、音楽室、図書室、多目的ホール等を共有しており、各学年の教室からの動線が自然な異学年交流を促進させている。

**【地域とともに】** 小学校校舎増築にあたり地元から寄付された杉材をふんだんに使い、語り部の部屋や郷土資料室を設置する等、地域との関わりを感じながら温かく落ち着いた教育環境とするための工夫がされている。

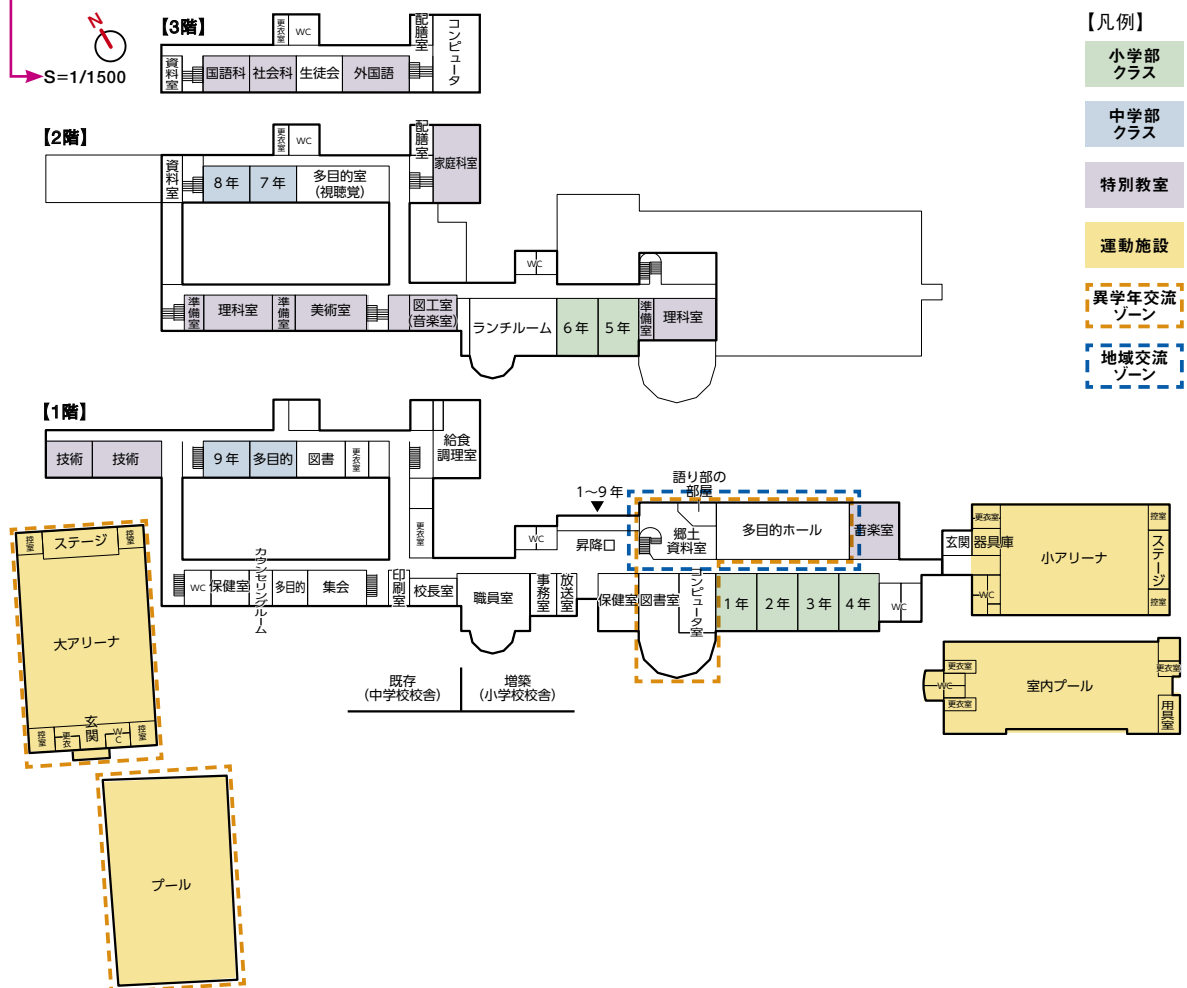
### 配置図



校地		従来からの中学校敷地 +新しい敷地	
面積	グラウンド	19,108m <sup>2</sup>	
		小 7,274m <sup>2</sup>	中 11,834m <sup>2</sup>
	校舎	1,780m <sup>2</sup>	
		小 922m <sup>2</sup>	中 858m <sup>2</sup>
体育館		小 2,926m <sup>2</sup>	中 3,640m <sup>2</sup>

ご確認を  
お願い致します

### 平面図



施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

# 1. 異学年交流スペースの充実

## 音楽室と一体となる多目的ホール

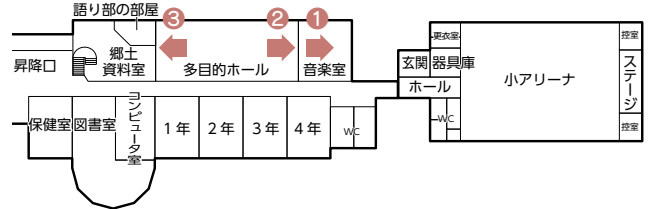


高解像度を  
お願い致します

施設一体型事例



高解像度を  
お願い致します



子供同士、教師、地域の人と交流し、豊かな感性と表現力・プレゼンテーション能力を育成する場として小中で共同利用する音楽室(1)と一体的に整備された多目的ホール(2)。ここでは広い空間と階段状の椅子(3)を活かし、着任式・始業式・終業式・修了式・中体連壮行会(小中合同)、小学校集会活動(週1回)、部活動(小学校合奏部、中学校吹奏楽部)、各教科発表活動の場として活用している。また地域・保護者が約200人参加する夜の音楽会も開かれる。

## 図書室



小中で共同利用している図書室(4、5)は、学校の中心、昇降口に近い位置に配置。児童生徒がいつでも自由に使える図書室となっている。また、下校時にバス通学の子供たちがバスを待つ居場所にもなっている。



施設分離型事例

事例間比較

## 2. 小中一貫教育の実施に適した安全性の確保

### アリーナと屋内プール



運動施設は2つずつ整備されている。既存施設である大アリーナと屋外プールは主に中学生用、小学校校舎側に増設された小アリーナ(6)と屋内プール(7)は、主に小学生用と使い分けがされている。

屋内プールは、気温の低い日や、悪天候の日などは中学生も利用する。夏休みには、PTAの協力により、期間を決めて子供たちに開放している。また、小中学校で特設水泳部を組織し、放課後練習に励んでいる。

活動量や体格差に配慮し、芝のプレイコートを休み時間や放課後に安心して遊べる場所として確保している。

## 3. 地域とともにある学校施設の整備

### 郷土資料室・語り部の部屋



和室で囲炉裏のある語り部の部屋(8)では地域の住民を招き民話学習や茶道教室等が行われている。

郷土資料室(9)は、郷土が生んだ文学者や芸術家等の作品コーナーを設け、総合的な学習の時間等で、郷土の偉人についての学習を行っている。



地元杉材をふんだんに使用し、ゆとりある教室設計をしている。子供たちが感性を育み、落ち着いて学習に取り組めるように教育環境を工夫している。(10:廊下、11:小学校校舎の内装)

## 校長の視点から

こやま たけゆき  
湖南小中学校 校長 小山 健幸

本校が目指す小中一貫教育重点事項の一つに、「表現力の育成」があげられる。学習の成果を伝えあう場や、発表する機会を多く教育活動に取り入れたいという理由から、291㎡ある多目的ホールを設置した。多目的ホールでは、児童生徒同士の発表会、始業式、終業式や地域の方々を招いた様々な行事等を行っている。さらに、地域人材を活用した表現力育成を目指して、民話学習ができる語り部の部屋や郷土の偉人を紹介した郷土資料室が設けられ、「ふるさと湖南誇りを胸に」の育成に役立っている。

# 春日学園

茨城県 つくば市立春日小学校・春日中学校



校舎外観

## 背景

つくばエクスプレスの開通に伴い、研究学園都市駅周辺の住宅開発が進み、人口が急増。このため、施設一体型の小中一貫教育校の新設を計画、平成24年に開校した。春日学園は、つくば市で初めての施設一体型小中一貫校である。つくば市では、平成24年度から、市内の全小・中学校53校（15学園）において、小中一貫教育が本格実施している。

## 学校概要

学校規模	[小]普通:34学級(1163人) 特別支援:2学級(11人) [中]普通:9学級(288人) 特別支援:2学級(2人)
学年段階の区切り	4-3-2
開校年	平成24年(2012年)
構造	鉄筋コンクリート造
階数	地上3階
校地面積	46,628㎡
延床面積	14,718㎡

## 教育上の特色

「未来を拓き、社会に貢献できる人材の育成」を教育目標とし、9年間の継続的な学びを通して「論理的に考える力」「人と豊かにかかわる力」を育てることを重点においている。5年生から部分的に教科担任制を導入するなど、4-3-2制を取り入れた柔軟な区切りを設けるとともに、「考える時間」「つくばスタイル科」等、9年間の学びの連続性を活かしたカリキュラムを構築している。また、兼務発令による中学校数学教員の小学算数授業、小・中学校教員による音楽のT・T授業や、大学や研究機関との連携によるロボットの授業など多様で実践的な活動を行っている。

## 学校運営(マネジメント体制)

1人の校長が小・中学校長を兼務する。教育課程の編成や生徒指導の中心となる教諭や養護教諭、事務職員は兼務発令されており、小中相互の乗り入れ授業の実施、教務関係、生徒指導関係、学校事務の共同実施を行っている。

	学 年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
学年段階の区切り	前期			中期			後期		
授業方法	学級担任制				教科担任制				
運営方式	特別教室型								
授業時間	45分				50分				
校長	1人								
副校長・教頭	1人						1人		
部活動	なし						部活動		
PTA	PTA組織を一本化								
ゾーニング	1階	2階	1階	3階	2階	3階			
校長室	特別教室棟1階								
職員室	特別教室棟1階(学年段階の区切りごとの座席配置)								
保健室	特別教室棟1階								
特別支援学級	特別教室棟1階				特別教室棟1階				
音楽室	特別教室棟1階				特別教室棟3階				
家庭科室	なし			特別教室棟3階					
図書室	特別教室棟2階								
ランチルーム					なし				
昇降口	普通教室棟1階								
体育館	1階								
グラウンド	サブグラウンド				グラウンド				
プール	1階								
給食室	特別教室棟1~3階(給食センター方式)								

## 計画・設計上のポイント

1. 異学年交流スペースの充実
2. 小中一貫した教育課程に対応した施設設備
3. 学校運営の一貫性確保への対応

## 施設上の特色

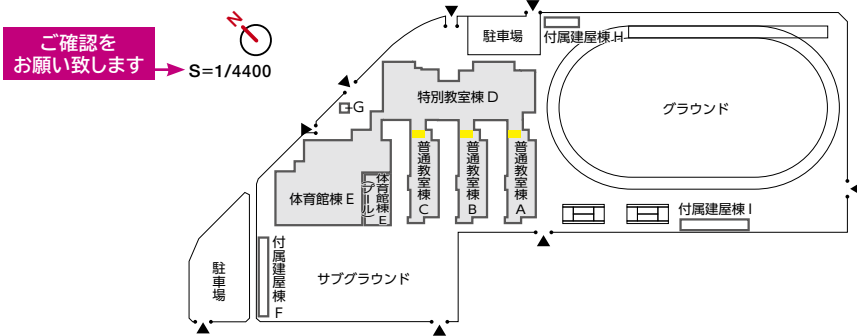
**【全体の構成】** 校舎は普通教室棟と特別教室棟3棟からなり、普通教室棟2、3階は特別教室棟と渡り廊下でつながっている。太陽光発電や蓄熱利用など環境共生を体験しながら学べるエコスクールとなっている。

**【教育活動の一貫性確保】** 特別教室は学習意欲を引き出すよう、教科ごとにテーマ性をもたせ、内装にも工夫がされている。

**【諸室の共有】** 体育館、図書室、プール、職員室等を小中で共同利用している。学年共通で使用する図書室やコンピューター室は2階にまとめて配置されている。

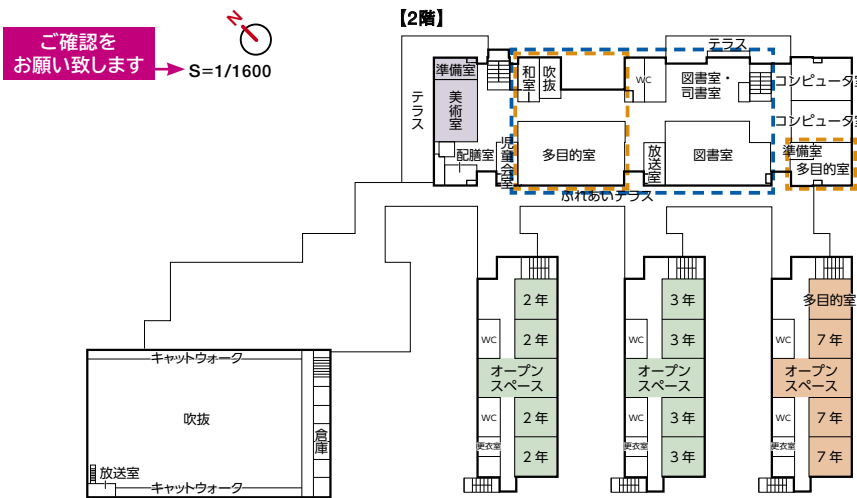
**【運営の一貫性確保】** 小中一体の職員室、保健室等の管理諸室は、特別教室棟の1階にまとめられている。

配置図

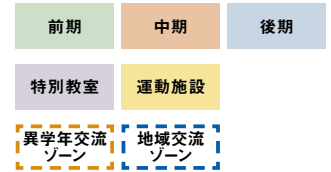


校地		新しい敷地	
面積	グラウンド	26,194m <sup>2</sup>	
		小 4,046m <sup>2</sup>	中 22,148m <sup>2</sup>
	校舎	12,691m <sup>2</sup>	
	小 7,520m <sup>2</sup>	中 5,171m <sup>2</sup>	
	体育館	2,027m <sup>2</sup>	
	小 1,006m <sup>2</sup>	中 1,021m <sup>2</sup>	

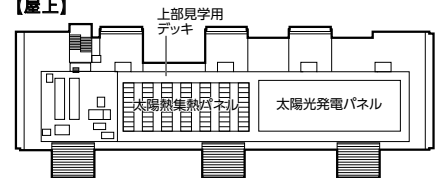
平面図



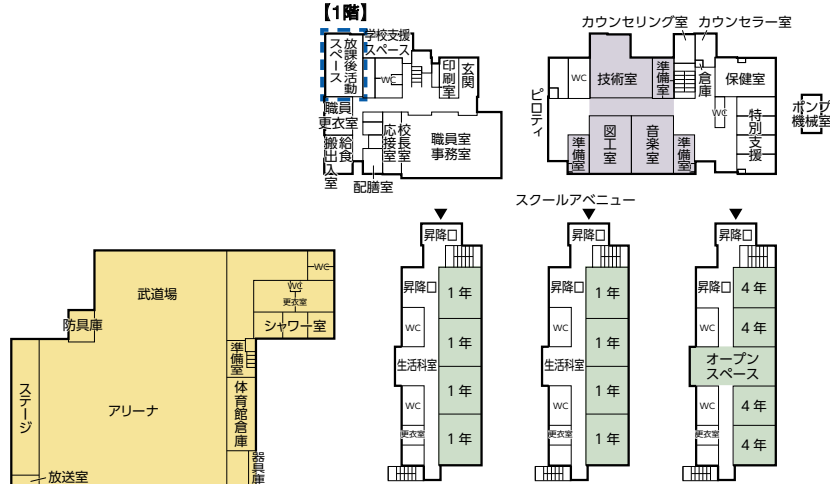
【凡例】



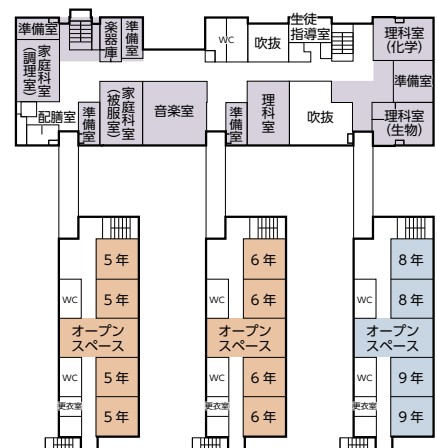
【屋上】



【1階】



【3階】



施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

## 1. 異学年交流スペースの充実

### ■ 図書室



図書室は低学年(1)と高学年(2)でゾーンが設けられてはいるが、全体的には間仕切りが無くオープンな空間になっており、異学年の自然な交流ができる空間となっている。低学年ゾーンは吹き抜けの構造になっており開放的で明るい雰囲気である。閲覧スペースには、木よりも柔らかいコルク床を採用している。高学年ゾーンでは落ち着いて読書や調べ物学習に取り組めるような整然とした机や本棚の配置がなされている。

### ■ 図書室と隣接するコンピュータ室



コンピュータ室(3)は図書室と同じフロアに配しメディアゾーンとして一体的な利用が可能である。家具が分散配置型となっており、交流授業で上級学年が指導に参加する際にも適した空間となっている。

## 2. 小中一貫した教育課程に対応した施設設備

### ■ 理科室



理科室は小学生用(4)、中学生用(5)とも3階に集め、小学生用は、実験時に全員が黒板を向けるように半楕円形の教室となっている。共有のフロアには、つくばの最先端技術研究を感じさせる展示物やサイエンスメディアスペースを設置するなどテーマ性を持たせた配置にしている。

### ■ アプローチ壁面

アインシュタインなどの歴史的な名言を壁面に描き、知的好奇心の向上を図っている。(7:アプローチ壁面)



### ■ 音楽室



5年生から9年生が利用する音楽室2(6)は開放的なつくりになっており、ゆとりあるスペースを活かした創作・表現活動が展開されている。

### □ つくばスタイル科

「つくばスタイル科」を中心とする9年間の連続した活動の中で、つくば市全体で取り組まれている「つくば型次世代型スキル」の育成を目指している。つくばスタイル科では近隣の大学や研究機関等と連携し、バランスのとれた人間性と国際的な視点を兼ね備えたつくば市民の育成をテーマに様々な活動に取り組んでいる。(8、9:つくばスタイル科活動の様子)





### 3. 学校運営の一貫性確保への対応

#### 校務センター



職員室、事務室が統合された校務センター(10)は、積極的なICTの導入が図られており、大人数を擁しているにもかかわらず機能的である。(11:職員会議の様子)

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

#### 環境学習の意欲を高めるエコスクール



化石燃料に頼らない建物の実現を目指し、太陽光発電や蓄熱装置、雨水のトイレ洗浄水への再利用などを装備している。各教室すべてに自然通風が可能な建築になっており、また普通教室には緑のカーテンが学園生によって栽培されている。環境共生対策について、省エネ装置等の紹介盤(12)設置や発電状況等を校舎内で常時電子パネル(14)にて展示するなど、「見える化」を進め学園内で自主的な取り組みを促している。(13写真中央:屋上に設置してある蓄熱パネル)



#### 校長の視点から

かたおか きよし  
春日学園 校長 片岡 浄

本学園では、小1～中3までの子供が、同じ学舎で学んでいる。また、9年間の連続した学びを保証し、人と豊かに関わる力の育成に努めている。学舎の特長は、明るくオープンな雰囲気のある教室、読書に集中することができる学校図書館、発達段階を配慮した特別教室など、学年や学級の垣根を越え、人間関係を構築しやすい環境構成になっている。子供や保護者からの評判も極めてよい。これからも恵まれた施設で、異学年交流や小中の教員による交換授業など特色ある教育の推進に努めていきたい。

▶ 新築

# 荏原平塚学園

東京都 品川区立平塚小学校・荏原平塚中学校



高解像度を  
お願い致します

グラウンド側から見た校舎外観



高解像度を  
お願い致します

校舎外観

## 背景

品川区では平成15年に小中一貫特区の認定を受け、平成18年度から区内の全ての小・中学校において、小中一貫教育への本格的移行を実施した。平成22年に品川区で4校目の施設一体型校として荏原平塚学園を開校した。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

	学 年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
学年段階の区切り	初等部				中等部			高等部	
授業方法	学級担任制				教科担任制				
運営方式	特別教室型								
授業時間	45分				※	50分			
校長	小中学校長1人								
副校長・教頭	小学校副校長1人						中学校副校長2人		
部活動	なし				部活動				
PTA	PTA組織を一本化								
ゾーニング	1階	2階	3階				4階		
校長室	2階								
職員室	2階(学年段階の区切りごとの座席配置)								
保健室	1階								
特別支援学級					なし				
音楽室	2階							5階	
家庭科室	なし				5階				
図書室	3階								
ランチルーム	5階ホール								
昇降口	各教室へ直結				1階				
体育館	地下2階、地下1階								
グラウンド	グラウンド								
プール	6階(床昇降式)								
給食室	1階(単独校方式)								

※5年の後期から50分に移行

## 学校概要

学校規模	[小]普 通:13学級(359人) [中]普 通: 6学級(178人)
学年段階の区切り	4-3-2
開校年	平成22年(2010年)
構造	鉄筋コンクリート造
階数	地上6階/地下2階
校地面積	12,113m <sup>2</sup>
延床面積	14,202m <sup>2</sup>

## 教育上の特色

「好学」「誠意」「鍛錬」を教育目標にかけ、学力向上と人間形成の視点から9年間を通して主に次のような指導を実施している。

- ・小学生からの英語授業
- ・生活指導を支える市民科学習
- ・ステップアップ学習(基礎学力向上)
- ・あいさつ運動
- ・異学年交流活動
- ・読書活動

## 学校運営(マネジメント体制)

1人の校長が小・中学校を兼務しているが、副校長が3名配置されており、それぞれ小中の担当が決まっている。

全職員に対して兼務発令されており、生徒指導関係、学校事務は共同実施している。

## 計画・設計上のポイント

1. 学年段階の区切りに対応した空間構成、施設機能
2. 地域とともにある学校施設の整備
3. 異学年交流スペースの充実
4. 小中一貫教育の実施に適した安全性の確保

## 施設上の特色

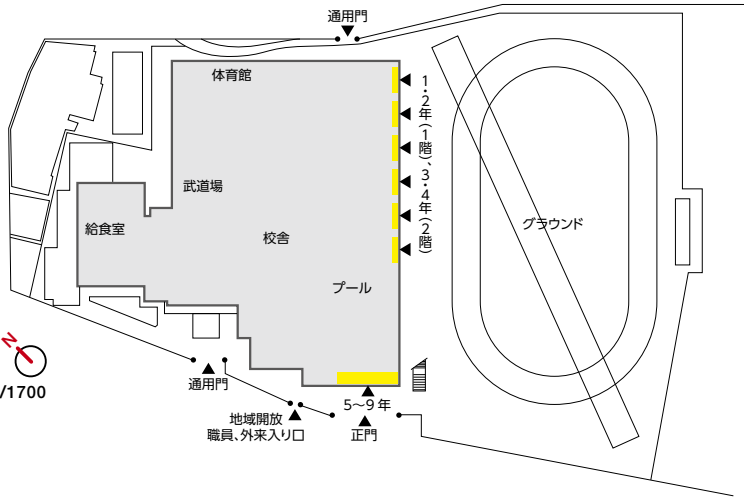
**【全体の構成】** 都市部の施設一体型校として、限られた敷地の中にできるだけ広い面積のグラウンドを確保するために、体育館を地下2階に配置し、屋上にプールや広場を設けるなど、積層することでコンパクトにまとめている。

**【教育活動の一貫性確保】** 普通教室は、学年段階の区切りに合わせて1～4年が1、2階、5～7年が3階、8～9年が4階のグラウンド側にまとめ、特別教室は普通教室と階段を挟んで反対側にまとめて配置されている。1～4年の昇降口は各教室のグラウンド側に設けてある。

**【運営の一体性確保】** 小中一体の校務センターや会議室等の教職員スペースは2階にまとめられている。

**【地域とともに】** 北側住宅地への日陰と圧迫感軽減のため、壁面を後退させ、その空間を歩道やポケットパーク、屋上広場など、地域の憩いの場や、子供の遊び場、交流の場として活用している。

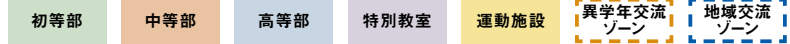
配置図



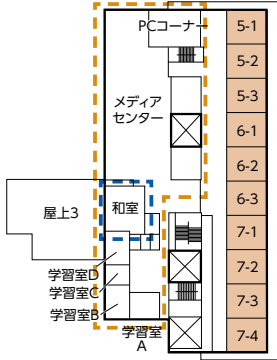
校地		従来からの中学校の敷地			
面積	グラウンド	4,900m <sup>2</sup>			
	校舎	小	5,910m <sup>2</sup>	中	6,201m <sup>2</sup>
		小	906m <sup>2</sup>	中	1,185m <sup>2</sup>
	体育館	2,091m <sup>2</sup>			

平面図

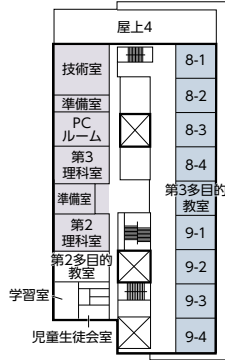
【凡例】



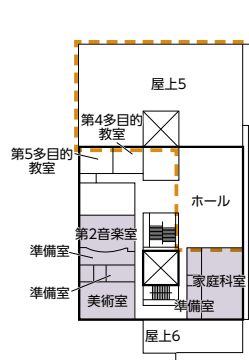
【3階】



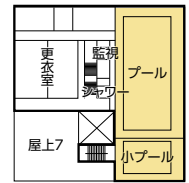
【4階】



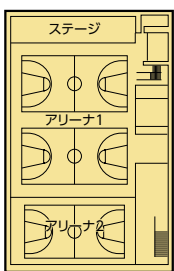
【5階】



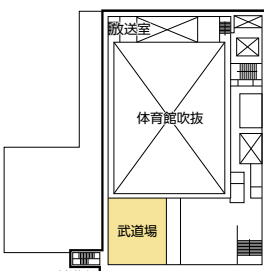
【6階】



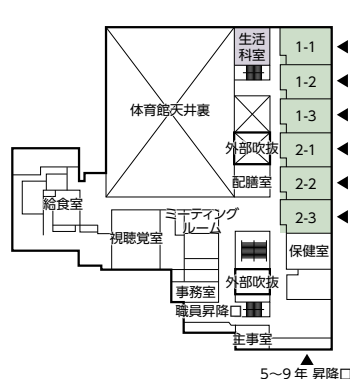
【地下2階】



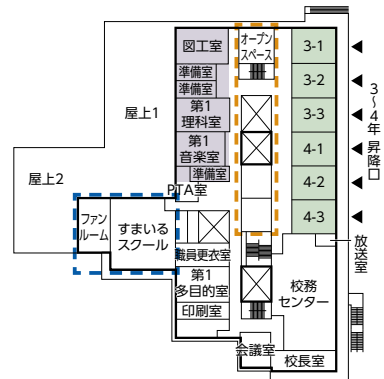
【地下1階】



【1階】



【2階】



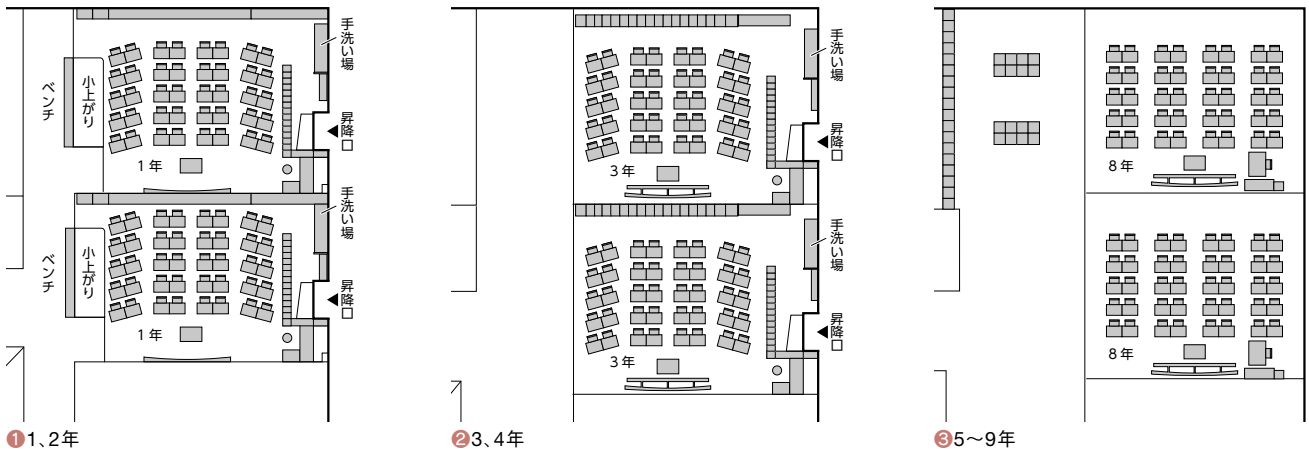
施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

## 1. 学年段階の区切りに対応した空間構成、施設機能

### 普通教室まわり



① 1、2年

② 3、4年

③ 5～9年

普通教室まわりは、品川区の教育改革計画「プラン21」の理念に基づき、学習形態の進展に応じて学年別に計画されている。1、2年の教室は総合教室型を採用し、昇降口、手洗い場、ロッカー等を教室内に配置して1日の生活がほぼ教室内で完結するように設計されている(①)。3、4年はクラス単位での活動を中心に想定し、教室内の設備を充実させると共に、クラス単位のグループ学習だけでなく学年単位での習熟度別学習にも対応できるオープンスペースを併設している(②)。5年以上の教室は学年単位の習熟度学習に対応し、オープンスペースにPCを置いた学習スペースを設置している。ステップアップ学習(基礎学力向上)に利用できる多目的教室を同じフロアに計画している。

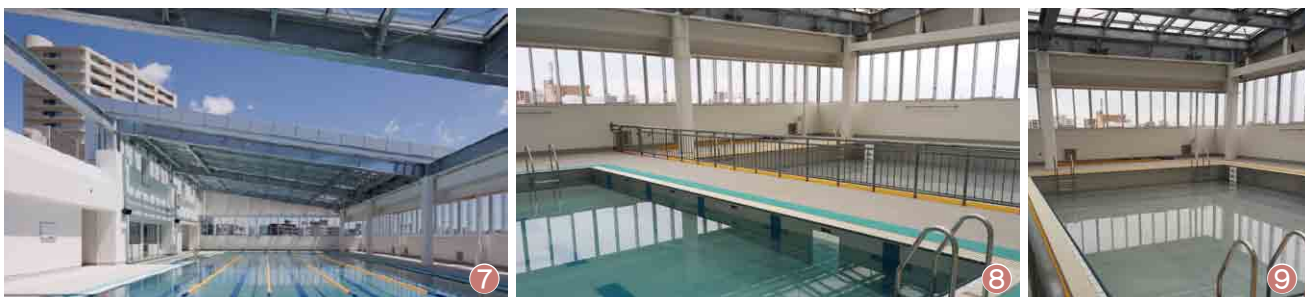
## 2. 小中一貫教育の実施に適した安全性の確保

### 避難経路



1～4年は各教室に昇降口(④、⑤)が整備されており、バルコニーから直接教室へ入ることができる。学年が上がることによる環境の変化を実現するとともに、避難ルートとしても有効である。また普通教室のあるフロアには3カ所に階段を設けている。階段ごとに色分けし、中央の階段(⑥)は幅を広くすることで、通常時も避難時も児童生徒が混雑しないように計画されている。

### 全天候・全学年対応型プール



校舎最上階の6階に設置したプール(⑦、⑧)は、全天候に対応できるように開閉屋根式を採用し、5月～10月の授業に対応している。また、水位調整のバランスタンクの代わりに小プール(⑨)を設置し、低学年が使用。

### 3. 異学年交流スペースの充実

#### メディアセンター周辺



全学年が利用しやすい3階に図書室とPC教室を一体化したメディアセンター（10、11）や、和室（12）、多目的教室を設けている。和室は図書の閲覧にも利用できるほか、屋上の日本庭園（13）に面し、日本の四季の変化を感じることができる。これらは学年間だけでなく、地域住民を含めた多様な交流の場としても活用されている。

施設一体型事例

### 4. 地域とともにある学校施設の整備

#### 近隣に配慮した都市型校舎



体育館の地下化やプールの屋上設置など、土地の高度利用を行い、広い面積のグラウンドを確保すると共に地上部分の校舎のボリュームを小さくした。

さらに低層住宅地側には、歩道やポケットパーク、屋上緑化を設置するなど圧迫感の軽減を図り、周辺の良好な環境づくりに配慮している。（14、15：学校敷地内模型、16：グラウンドから見た校舎）

施設分離型事例

事例間比較

#### 校長の視点から

荏原平塚学園 校長 青木 経

施設一体型小中一貫校において一番に配慮しなければならないのは、それぞれの学年やブロック、更には学園全体で行う学習活動に応じた施設が整っているかである。

本学園は今までの小中一貫校の問題点が改善され、子供たちの動線に配慮した低学年の教室や高学年での個別学習が可能な学習室が整っている。また、2カ所の屋上広場や文化的な施設を集中させた3階には和室と日本庭園があり、精神的にゆとりある環境を生み出している。

▶ 新築、整備後に増築・改修

# はるひ野小中学校

神奈川県 川崎市立はるひ野小学校・はるひ野中学校



高解像度を  
お願い致します

校舎外観

## 背景

平成2年から土地区画整理事業が進められた川崎市麻生区黒川・はるひ野地区に、街づくりの核となるべき公共施設として、小学校の建設が予定されていたが、地域の要望により中学校も同時に建設することとなった。その後、学校建築の有識者も加わる基本計画検討委員会等での議論を経て、平成19年1月にPFI事業として学校建設に着手し、平成20年4月に開校した。

## 学校概要

学校規模	[小] 普通: 32学級(1077人) 特別支援: 6学級(6人) [中] 普通: 9学級(311人) 特別支援: 3学級(3人)
学年段階の区切り	4-3-2
開校年	平成20年(2008年)
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
階数	地上4階
校地面積	30,682m <sup>2</sup> ※うち7,894m <sup>2</sup> は増築に伴い追加
延床面積	20539m <sup>2</sup> ※うち4,800m <sup>2</sup> は平成26年に増築

## 教育上の特色

教育目標は「知力」「心情」「体力」「小中連携」がキーワードとなっており、楽しく学び、助け合い、明るく、だれとでも仲良く、という学校方針である。学習発表会や音楽集会など、各種行事を小中合同で行うほか、異学年を招待して行う授業を日常的に実施するなど、異学年が自然に交流しながら、学校方針を実践できるよう、様々な活動を積極的に取り入れている。

## 学校運営(マネジメント体制)

学校ごとに校長が配置されており、適宜連携を図っている。管理職を除く全教職員に対して兼務発令がされており、9年間を通して児童生徒の成長を見守っている。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

	学 年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
学年段階の区切り	前期			中期			後期		
授業方法	学級担任制						教科担任制		
運営方式	特別教室型						教科教室型		
授業時間	45分			50分					
校長	小学校長1人				中学校長1人				
副校長・教頭	小学校副校長1人				中学校副校長1人				
部活動	なし			ジュニアクラブ			部活動		
PTA	PTA組織を一本化								
ゾーニング	1階	2階	1階	2階	4階	3階	3階	4階	
校長室	1階							1階	
職員室					1階				
保健室					1階				
特別支援学級				1階			3階		
音楽室				3階			3階		
家庭科室	なし			3階(被服室・調理室)					
図書室					2階				
ランチルーム				なし			3階		1階
昇降口	1階	2階	1階	2階					2階
体育館	小アリーナ2階						大アリーナ1階		
グラウンド	グラウンド								
プール	屋上(床可動式)								
給食室	1階(単独校方式)							なし	



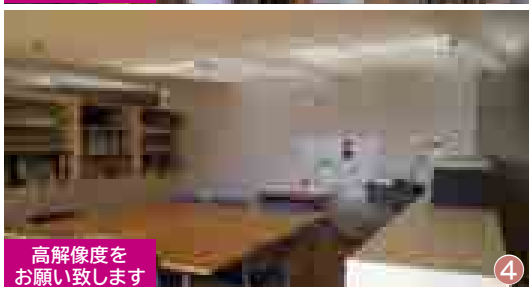
## 1. 小中一貫した教育課程に対応した施設環境

### 教科教室



- **英語**: ヒアリングの授業で利用するスピーカを設置。また、朗読授業を想定して遮音性が確保できる構造となっている。(1)
- **理科**: 理科室は実験と講義に対応した2室があり、講義対応室では、すぐに暗転できる機能や映像音響設備が充実している。(2)

### 収納・展示・掲示



クラスルーム(3)には後方にオープン型個別収納棚を設置、廊下にはキャスター付きオープン型シェルフ(4)を配置、教科教室と廊下の仕切りは両面ガラスとなる大型収納棚(5)を採用するなど、学校全体が展示空間になる「しかけ」を設け、そこが児童生徒のコミュニケーションスペースになるように設計。

### 発表スペース



校内にオープンスペース(6)を多く配置したり、階段(7、8)にたっぷりとした余裕をもたせることで、これらも発表の場として活用している。さまざまな発表のスペースを設けることで、「各教科」「総合的な学習の時間」や課外活動で作成した成果など、多様な発表の機会を創出している。(9はミニステージ)

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較



## 2. 学年段階の区切りに対応した空間構成、施設機能

### やすらぎの空間「パオ」



小学1・2年ゾーンには、包（パオ）<sup>(10)</sup>と呼ばれる小型の空間を配置。教師と児童たちが、同じ目線で活動できる。クラスのミニステージとしての活用もされる。

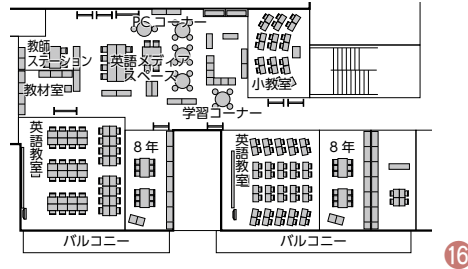
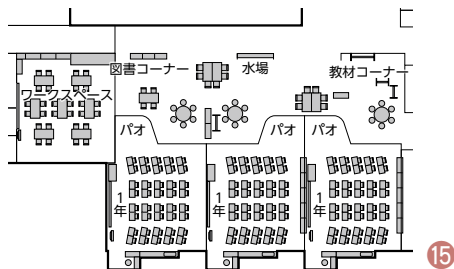
### 生活空間



利用する学年に応じてトイレのレイアウトを変化させ、明るく楽しいトイレ<sup>(11、12、13、14)</sup>を用意。児童生徒のスケールに合った生活環境の充実を図るように配慮している。



### 教室まわり



小学1、2年生の教室<sup>(15)</sup>は、教室内に様々な機能を内包させるため高学年教室より広くゆったりとしたつくりになっている。パオのような小さなスペースを教室内に設置することで、多様な学習活動を可能にするとともに、集団生活、学校生活に慣れるために子供が自分で居場所を選択できるような工夫がされている。

高学年教室<sup>(16)</sup>では、少人数教室を設置したり、教科ごとのまとまりをもたせたメディアスペースを設置したりすることで、教室内で集中して学習する時間と、オープンスペースや少人数教室、メディアスペース等と普通教室を一体的に利用して多様な学びを実践する時間の区別をつけることを可能にしている。

## 3. 学校運営の一貫性確保への対応

### 校務センター

校務センター<sup>(17)</sup>を一体的整備し、小中学校の先生が同じフロアで、仕切りがないオープンな空間で校務を行う。教員間の一体感を生み出しており、自ずと連携がとれている。



### 校長の視点から

おおくし かずひこ  
はるひ野小中学校 校長 大串 一彦

平成20年4月に開校した川崎市で初めての小中合築、施設一体型の小中連携校である。PFI事業で建設が行われ、小中連携教育を強く意識した校舎環境、管理運営・給食の民間委託、地域交流センターの併設など特徴的で高機能な学校施設を有している。小中合築という教育環境を生かした本校の最大の特徴は「小中9年間を通じた人間形成の実現と新たな学校文化の創出」である。小中9年間で小学部1年～4年、小学部5年～中学部1年、中学部2年～3年という4-3-2のブロックに分けた教育活動を実践し、いわゆる中一ギャップは無く、総合的な学習の時間を中心に小中学生が一緒に学習する場面を多く設定しており、思いやりなど豊かな人間性の育成が図られている。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較